

P-22 九州歯科大学口腔保健学科学生における学年毎の目標の変化

○中村 由紀¹、前田 直美¹、中村 桃子¹、星野 桂子¹、松下 智美¹、淵上 祐子¹、
福屋 祐子¹、杉山 裕香¹、中 雅美¹、鬼塚 千絵²、西野 宇信²、永松 浩²、
木尾 哲朗²、秋房 住郎³、引地 尚子⁴、柿木 保明¹、寺下 正道²

九州歯科大学口腔保健学科学生の2、3、4年次の学年末に目標を収集し、各学年を終え次年度を迎える学生の意識の変化を検討した。

口腔保健学科1期生25名に対し、2、3、4年次の学年末にマンダラチャートを用いて卒業時(2、3年次)あるいは卒業1年後(4年次)を想定した8つの目標と、目標毎に8つの方略を自由に記載させた。個々の目標を人間が持つ目標の「望まれる個人内の結果」(Ford & Nichols, 1991)にならって分類した。また、これを学修動機づけの概念的枠組みである課題価値の評定尺度でふるい分けた。

3年次では2年次と比べて、娯楽や健康などの「情動目標」、和合などの「主観的構成目標」が増大し、探求や理解などの「認知目標」が減少した。4年次では「認知目標」がさらに減少し、「主観的構成目標」である超越が増大していた。3年次での課題価値分類は2年次と比べて「利用価値」が増大し、「獲得価値」が減少した。4年次になると興味価値が増大し、利用価値が減少した。

今回の目標の収集は、臨床実習の前後と卒業前の時期に行った。臨床実習経験後は社会的環境への興味が増し、個人的な知的活動への興味が少なくなる傾向にあった。卒業が現実となった時期は、社会人としての新しい体験を期待していることが伺われた。課題価値分類では、進路に対する自律的な学修動機づけに繋がる「利用価値」が臨床実習後に増大しており、臨床実習の効果が示唆された。

口腔保健学科学生の目標の変化を分析した。その結果、臨床実習の経験が学修動機づけに、目前に控えた卒業が社会人を意識することに繋がったことが示唆された。

P-23 九州歯科大学における教育力評価のための教育実態調査および教育成果の検証

○豊野 孝^{1,6}、荒井 秋晴^{2,6}、吉野 賢一^{3,6}、東 泉^{4,6}、
片岡 真司^{1,6}、自見英治郎^{5,6}

九歯大・¹解剖学、²九歯大・総合教育、³九歯大・口腔保健、
⁴九歯大・応用薬理、⁵九歯大・生化学、⁶大学自己評価部会

本学の教育力評価のためには、歯学部学生の教育実態(学生生活、心身の健康状態など)を把握した上で、教育成果(教育満足度など)の検証を行って行く必要があると考えられる。そこで本研究では、本学の教育実態の把握および教育成果の検証をアンケート調査により行った。

歯学部学生(歯学科および口腔保健学科)を対象として、無記名のマークシート方式による調査を平成21年度から25年度まで年度毎に行った。講義、実習に対する各満足度、および本学教育の満足度(低い1～普通3～高い5)については5段階評価で調査を行い、これらの各項目の、経年変化を調べた。

実習の満足度については、平成22年度以降、満足群(高いおよび少し高い)の割合の増加が認められた。不満足群(少し低いおよび低い)に関しては平成23年度以降、その割合の減少が認められた。講義の満足度については、平成23年度以降、満足群の割合の増加が認められ、それに伴い不満足群の割合の減少が認められた。本学教育の満足度についても、講義の満足度と同様な満足群および不満足群の割合の増減が認められた。

平成23年度以降は、講義、実習および本学教育の満足度の増加が認められたことから、カリキュラムの改善などの教育改善が効果を上げていると推測された。